

大連友好記念館

大連友好記念大厦は、周囲の目を引く 20 世紀の建築物の中でも際立っている。100 年以上前に日本海の向こう側に建てられた管理事務所と類似したレプリカであるこの歴史的建造物は、日本の国際関係の複雑さを体現している。

複雑な歴史

この煉瓦と石と木でできた建造物は 1994 年、北九州市と中国・大連市との友好都市提携締結から 15 周年を記念して建てられた。この協定は、北九州市と大連市の複雑な関係に良い転機を示したものだ。

門司は 20 世紀初頭、日本と大連（当時英語圏では「ポート・アーサー」として知られていた）を結ぶ重要な港だった。日清戦争（1894-1895）を終結させた 1895 年の下関条約調印後、日本は一時的に大連を統治下に置いた。しかし間もなく、日本が中国に進出しすぎるのを防ぐため、ロシアがこの港の領有権を主張した。

大連は、日露戦争（1904～1905 年）後に日本が支配権を取り戻すまで、ロシアにとってアジア貿易の主要拠点だった。その後、大連は日本のこの地域の出先機関にとっての主要港となり、門司はアジア大陸へ向かう船の重要な寄港地となった。この関係は、日本が第二次世界大戦（1939-1945）に敗れるまで続いた。大連は 1950 年に中国に返還されるまでソ連が領有していた。

記念館が象徴する都市と同様、記念館にも複雑で多国籍な歴史がある。建物は、大連とその周辺地域で運行されていた満州横断鉄道（東清鉄道）の管理事務所をモデルにしている。この事務所は、1902 年にロシアの行政官が雇ったドイツ人建築家によって設計された。日本が大連を支配した後、事務所は大連倶楽部となった。1926 年には、その建物は日本橋図書館に改築された。

本物に近いレプリカ

大連友好記念館建設プロジェクトが始まった当初、候補として大連市内にある日本にゆかりのある 6 つの建物が検討された。ユニークなデザイン、希少性、歴史的価値、そして全体的な美しさのため旧日本橋図書館が選ばれた。

しかし、オリジナルの設計図や詳細な記録の欠如が、早くも建設上の障害として現れた。この課題を克服するため、建設チームは大連に赴き、本物の再現を確実にするため、モデル元となった建物の寸法を測り、記録した。大連から輸入された煉瓦は 45,000 ほど、御影

石は 5,000 ほどにも及び、基礎工事にも玄関の床やその他の場所に施された複雑な象嵌細工にも使用された。おそらく、石に刻まれた工具の跡さえも入念に再現されたと思われる。このためには 2 つの都市と国家の間での緊密な協力が必要であった。

この建物の建築様式は、多国籍的なルーツを反映している。高い尖塔の屋根やハーフティンバーの壁のあきらかなロシアやドイツのテイストだけでなく、瓦を重ねていく日本式とは異なる、織り合わされた曲線の瓦が連なる中国式の屋根も見られる。屋根瓦は当初大連から輸入されたが、現地の気候に合わず、島根県で作られた瓦が代用された。

1995 年から 2018 年まで、この建物は「大連友好記念図書館」として機能し、中国や東アジアの資料を専門に扱っていた。現在、1 階には中国料理レストラン「大連あかしあ」があり、2 階にはテーブルと座り心地の良い肘掛け椅子が置かれたパブリックスペースがある。また、大連に関する美術品や資料が展示されており、北京語と日本語の紹介ビデオもある。3 階は地元まちづくり団体のコミュニティスペースとなっている。